

新潟県立近代美術館便り

雪 椿 通 信



第5号

1995.10

企画展 大正期の日本画 金鈴社の五人展

9月23日(土)~10月22日(日)

大正5年5月、上野の森、東照宮境内にあった貸席「梅川亭」に6人の男たちが寄り合っていた。顔触れは、当時雑誌「中央美術」を主幹していた田口掬汀(たぐちきくてい)、文部省美術展覧会(文展)日本画の中堅画家であった吉川霊華(きっかわれいか)、結城素明(ゆうきそめい)、平福百穂(ひらふくひやくすい)、鍋木清方(かぶらききよかた)、松岡映丘(まつおかえいきゅう)の五人であった。それぞれの作風も異なっており、この会合で初めて顔を合わせた者もいたが、互いの画業については熟知している間柄であった。そして、個性と自由を尊重し、年に一、二回気儘な作品で展覧会や講演会を開くことを目的とした金鈴社の結成がその場で決まったのである。霊華と映丘は大和絵、素明と百穂は自然主義、清方は浮世絵系と違った立場に立脚していた五人が、「伝統的な絵画の近代化」という共通の理念によって、絵画の創造を自由に試みるための会でもあった。

大正6年に第1回展を開催してから、同11年にいたるまで7回の展覧会と6回の講演会を開催した後で突然その幕を閉じた。これは同人の間で、理由の如何にかかわらず一人でも会を止めようと言い出すものがあれば、会を解散しようという約束事を事前

に決めてあったからである。そして、会が解散したとき一番残念がったのは霊華であったという。

金鈴社が結成された大正期は、日本が明治以来の近代化の道を進むなかで個性の伸長が最も図られ、自我の開放をテーマとした新しい芸術活動が盛んになった時代であった。「大正デモクラシー」の言葉でも表されるように一種独特な雰囲気をもっていた。美術の分野においても官展(文展)が機構改革や反省を迫られるなかで種々の団体が結成され絵画活動を行い、また多くの個性が萌芽して各自琢磨しながら、個性的な描写、豊かな色彩など従来の伝統画には見られない日本画を創造し、それぞれが自己の世界を構築していった。

金鈴社で互いに知己を得たことが、各画家たちのこの後の創作活動に多大の影響を及ぼした会でもあった。五人は文展において受賞を重ね将来を囑望されていたが、運営や審査方法に対して肯定的ではなく、金鈴社展では日本画の自由な研究と個性の確立を目指した作品を発表した。そ

の後、文展の弊害を取りのぞくため大正8年に設置された帝国美術院展覧会(帝展)では、審査員となり東京画壇を代表する画家となっている。

本展は、作家達が新しい創造を目指して模索した日本画の本質と意義を再確認しようとする展覧会で、金鈴社展への出品作を中心に大正2年昭和5年までの約100点の作品で構成されている。

(学芸課普及係長 横山秀樹)



結城素明《幽其畫》1922年



鍋木清方《野崎村》1913年



吉川霊華《幽其畫》1920年

新潟県民会館ギャラリーでの企画展

中国現代絵画名作展 9月29日金～10月17日火

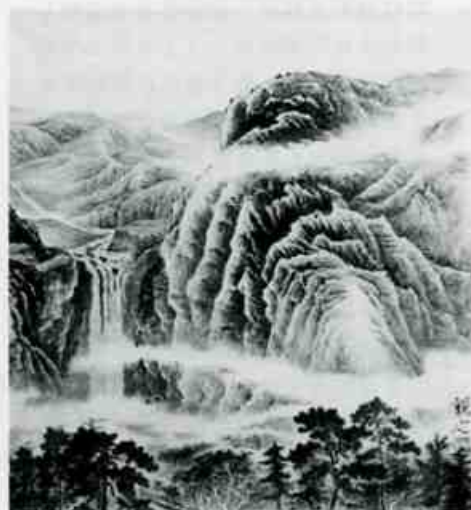
現在我々が日々を過ごすとき、身の辺りにある凡てといっても過言ではないほど、欧米の影響下にあるもので埋め尽くされてはいないだろうか。しかし、個々の精神の底流には、やはり、何か東洋の伝統的なものが潜み、流れていることを完全に否定することはできまい。日本の美術は西欧の文明が流入する以前、中国美術が師であった。それだけに止まらず、中国は社会制度や文化、凡ての範であった。そうした東洋世界に日本はあった。

今回開催する『中国現代絵画名作展』は、遠く離れた存在になってしまっている中国画壇の現状の一端を、中国三大美術学院のひとつである魯迅美術学院(遼寧省瀋陽市)の教授陣を中心とした11名の作品80点により紹介しようとするものである。欧米文化中心の中で欧米指向の美術を見慣れている我々にとって、忘れかけていた東洋の雄である中国の伝統文化の厚さを改めて感じさせるものであり、これを機に世界の一極である中国の美術について理解が深まれば幸いである。

(美術学芸員 松矢国憲)



郭西河 (春桂伴日)



李維之 (北高山水)



黎少輝 (秋夜園)

シリーズ新潟の美術 '96 平成8年3月2日出～3月20日水

「シリーズ新潟の美術」は、新潟県内に在住し、新潟を基盤に活躍している作家たちの意欲的な創作活動を、その近作・新作を通じて紹介する展覧会です。現代の多様な美術表現の状況を、郷土美術の視点にたって示す展覧会として、平成5年度からシリーズで開催してきました。

第3回目となる今年度は、次にあげる18名の作家による、約70点の作品を展示する予定です。

新潟を舞台に活動する作家たちが、今何を考え制作し続けているのかを、

この機会に感じていただければ幸いです。

出品作家

日本画 田中百合子 (新潟市)
倉田 久男 (新潟市)

洋画 橘 三紀 (新潟市)
新田 公彰 (新潟市)
藤田 由明 (新潟市)
北条佐江子 (弥彦村)
池山 阿有 (見附市)
大嶋 彰 (上越市)

版画 二村 裕子 (新津市)

彫刻 岡 充夫 (上越市)
星野 健司 (巻町)

工芸 川嶋 宣彦 (新潟市)
渡辺 隆 (朝日村)
長浜 数義 (相川町)
玉川 宣夫 (燕市)

書道 野中 吟雪 (新潟市)
高須 則子 (新潟市)
小林 蛙水 (新潟市)

企画展 表現主義彫刻

ドイツ現代美術へのプロローグ1890-1920 平成8年2月9日金～3月24日(日)

二度目の世界大戦の終結から半世紀が過ぎ、検証が不十分なまま風化していく個々の事実がある反面、着実に広がっていく時間的な距離によって歴史評価の対象としての輪郭はぼんやりと浮び上りつつある状況を我々は眼にしています。ことに美術作品に関しては、数々のタブーに対して幾分かの留保をしながらも勇気をもって発言や議論が行なわれるようになったのはようやく最近のことであり、ラベルの安易な張り替えによってよしとする態度さえ忌避できるのであれば、極限下における美術とその果たした役割について検討を加える態度は今後も維持されていかなくてはならないでしょう。

同じ立場で1945年を迎えた筈のドイツと日本の戦後処理が必ずしも同様でなかったことは頻りに指摘され

ますが、過去の「文化活動」の位置付けというのはドイツにおいても到底容易なことではなく、種物に触るように、それでも大きな努力と勇気とをもって論議が続けられています。ひとたび文化に凌辱を加える力が席卷した後は、途方もなく長い時間がその回復のために費やされねばならないのです。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
〈表現主義〉とは、狭義には1910年代のドイツにおける一連の美術運動を指し、中でも活発な動きを見せた「ブリュッケ(橋)」と「ブラウエー・ライター(青騎士)」という二つのグループによって知られています。しかし〈表現主義〉という言葉は頻りに広義に転用され、19世紀末からの後期印象主義や象徴主義、あるいは各地の分離派運動の落し子として汎ヨーロッパ的な世紀転換期の流れの中に位置付けて論じられる他、1920年代を経て第三帝国にまで継続して展開される運動とその多様化が問題とされたり、包括的に20世紀前半の前衛美術の諸様態として

扱われる場合、さらには「表現主義的」という語とともにグリューネバルトやゴヤ、戦後美術にまで適用される時もあります。

20世紀の初頭、ドイツという土壌の上に多様な展開を見せた狭義の表現主義運動については、しばしば第一次大戦後にはむしろ体制に取り込まれる形でその革新性を失ったとされ(アドルフ)、1920年の大々的な表現主義展の成功をもって「表現主義は死んだ」(W・パウゼンシュタイン)などとも言われました。もちろん美術を発展史的に「イズム」で輪切りにするのは批評家の、また時には芸術家自身の仕事であったかもしれませんが、少なくとも1920年当時の社会(=一般大衆)にとっては〈表現主義〉とはようやく受け入れられて浸透し始めた概念であり、影響力を及ぼすのはまさにそれからであったという見方もあります(マルクーゼ)。確かに1930年代、政権をとったナチスによって標的とされたのは、当時のドイツにおいて〈表現主義〉がなお影響力の大きい現代美術であったからに他ならないでしょう。またその折に第三帝国の美術観に合致



ヴィルヘルム・レームブルック 《ひざますく女》
1911年 ブロンズ
作者直筆
Photo Credit: Bernd Kirtz, Duisburg



エルンスト・バルラッハ 《ロシアの貧乏女II》
1907年 ブロンズ
エルンスト・バルラッハ・ハウス
© Ernst und Hans Barlach GbR
Lizenzverwaltung,
Federal Republic of Germany, 1995

しないとして弾圧された作品の幅が雑多とっていいほどに広がったのは、下された判断が明確な概念規定とは無縁の反動的な芸術理解あるいは無理解に立脚していたことを物語っています。

ナチ政権の伸張と平行して美術界の粛正は進行しました。それは徹底的であり、用いられた手段の基本線は、誹謗と中傷でした。例えば「芸術ボルシェヴィズム」「国際的=非アーリア的」「ユダヤ」「奇形」「不具」等、本来芸術作品を扱う時には全く意味を持たない筈の言葉が恐喝的に用いられました。本来意味がないという点では、〈表現主義者〉の作品と障害者たちが描いた絵の類似の指摘も同様です。またそれら「不快な印象を与える」とされた絵画が幾らで取引されたかを強調し、購入にあたった美術館の館長たちが公金の無駄遣いという非難を受けて公職から追放されました。理性的な判断よりも、原始的な本能に訴えかけるほうが効果的であることを承知した方法がとられたのです。マイナス評価は幾らでも捏造でき、それらを補強するために三流の芸術家や美術専門家、ナチ協力者たちがお互いのプラス評価を保証し合う——1930年代にはこのようにして作家と批評家の両陣営から、本来その位置を占めるべき人々が締め出されていきました。まさにドイツの「血と土」の美術とそれ以外という二分法が、他の全ての尺度を沈黙させていったのです。

制作活動を封じられ、或いは身の危険を感じて国外に脱出したり、実際に命を縮めてしまった芸術家・知識人が多くいたことは、当然のことながら戦後のドイツの文化にとって取り返しのつかない損失となりました。完全な空白状態の中に芸術が再び息を吹き返すのは簡単ではなく、戦後は表現主義の遺産はまずフランス（アンフォルメル、タシスム）やアメリカ（抽象表現主義）に受け継がれていくことになります。

◆◆◆
今回の展覧会では、19世紀末の象徴主義的な作品に始まり、第一次世界大戦の絶望的な敗北からワイマール時代を経て、第三帝国の軍靴の響きが遠くに聞こえてくるまでの時期に焦点を当て、彫刻を中心に油彩・版画を含めて約150点を紹介します。副題にある「1890-1920」年というのは、一般的には〈表現主義〉の播種期から頂点までとっていいでしょう。しかし前述したように、〈表現主義〉と呼ばれる一群の作品は、この後すぐに第三帝国の誕生と共にほぼ完全に拒否され踏みこじられることになってしまいます。出品作品の中には、後に「退廃美術展」(※)の壁に掛けられることになったものが少なからずありますし、また実際にナチの政権奪取後に制作された作品も含まれています。

本来「退廃した」芸術というものは存在しません。それを退廃と感じる人がいるだけです。しかし最終的

に作品の焼却にまで行き着くような無知と無神経がはびこる世界でなお自己の芸術を貫くのは、強い意志と絶望とが背中合わせになっているような孤独な作業であったといえるでしょう。不運な時代に生まれ合わせた芸術家たちの作品に、必要以上に純粹な芸術至上主義の反映を読み取ろうとするのは一つの誘惑として退けなければなりません(実際ナチ政権さえ認めてくれるのなら社会的にはそちら側にまわりたいと願う弱さを抱えていた者も少なくなかったのです)、しかしそれでもなお、暗い予感に身を震わせ、苦痛に耐えながら生み出された作品の中には、見る者を圧倒する力強さがあることを認めないわけにはいきません。

一度断絶したかに見えたドイツの現代芸術も、現在では活況を呈しています。しかし例えばボイスの国境拒否がナチ・イデオロギーに代表される国家意識への一種のアンチ・テーゼであることを考える時、全てが終わったわけではないということを改めて考えずにはいられません。

〈表現主義者〉あるいはそのように総称された一連の芸術家たちが直面した問題は、現在でも我々の身近で日常の中に埋没しながら次の出番を待っており、それらとの関いは今なお芸術家や批評家の中に継続しているのだと信じていたものです。特に彫刻は建築と並んでイデオロギーの代弁者となりやすい芸術形式です。そのことを踏まえてもう一度今世紀の出発点の美術を眺めることに、さらに今日的な意義を見いだしてもらえればと思います。

※ナチが近代美術攻撃のためにネガティブな意図をもって開催した展覧会。1995年8月から1996年1月にかけて、神奈川県立近代美術館、宮城県美術館、高知県立美術館、山口県立美術館で「芸術の危機—ヒトラーと退廃美術展」が開催されており、詳細な図録を参照できます。

(美術学芸員 佐々木奈美子)



エーリヒ・ヘッケル(しゃがむ女)
1912年 シナノキ
作者遺贈
©Erich Heckel Estate, Hommenhofen, 1995



ケーテ・コルヴィッツ(母と二人の子)
1924-1927年 ブロンズ
新潟県立近代美術館

平成7年度後半 普及事業のご案内

【講演会】

「大正期の日本画 金鈴社の五人展」〔9月23日(土)～10月22日(日)〕

講演会：講堂にて 聴講無料

9月23日(土) 午後2時より 講師：横山秀樹 (当館学芸課普及係長)

10月7日(土) 午後2時より 講師：田中日佐夫 (成城大学教授)

作品解説会：企画展示室にて

9月30日(土)、10月14日(土)、10月21日(土) 午後2時より

「表現主義彫刻 ドイツ現代美術へのプロローグ1890-1920」〔平成8年2月9日(金)～3月24日(日)〕

講演会：2月24日(土) 午後2時より 講師：岩淵達治 (学習院大学教授、演出家)

【映画鑑賞会】 毎月第2土曜日午後2時より 講堂にて 入場無料

第1回 8月19日 親子で楽しむ作品『クール・ランニング』

第2回 9月9日 映画誕生100年

「動きの魔法ー楽しい映像の世界ー」

第3回 10月14日 巨匠の名画ー小津安二郎と黒澤明

「椿三十郎」「東京物語」

第4回 3月9日 表現主義映画「カリガリ博士」「メトロポリス」



「椿三十郎」
公開当時のポスター

【ミュージアムコンサート】 午後2時より 入場無料

第1回 11月18日 相馬上子・伊藤美香デュオコンサート (講堂にて 要申込)

第2回 2月10日 現代舞踊公演 (ギャラリーにて)

【美術鑑賞講座】 午後2時より 講堂にて 聴講無料

第1回 11月4日(土) ジャポニスム 講師：鶴岡真弓 (東北芸術工科大学講師)

第2回 11月25日(土) ジャポニスム 講師：佐々木奈美子 (当館学芸員)

第3回 12月2日(土) 日本の美 講師：親跡峻 (当館学芸課長)

第4回 1月6日(土) 美術教育 講師：宮崎俊英 (当館学芸員)

【音楽鑑賞講座】 12月～3月の第3土曜日 (予定) 午後2時より 講堂にて 聴講無料

講師：前川誠郎 (新潟県立近代美術館長)

第1回 12月16日(土) 第2回 1月20日(土)

第3回 2月17日(土) 第4回 3月16日(土) ※開講日は多少変更することがあります。

■表紙作品解説 岸田劉生《冬枯れの道路(原宿付近写生)》



1916(大正5年)
油彩・キャンバス 80.5×80.0cm

時勢に逆行するかのようには北吹クラシックへの傾斜を深め、劉生の代々木時代といわれる一様式を確立した時期の代表作です。劉生はこの時期、毛の粗い平筆を柔かい丸筆に替え、細かい筆使いによる忠実な写実により独特の美を作り上げました。

非常に大胆な構図の作品ですが、同様の切り通しの風景は東京国立近

代美術館の《切り通しの写生》(1915年)を始めとして幾度も描かれています。

古典的な表現の中に、踏みしめられた道路の硬い土の感じ、枯草に見える冬のうら寂しき等をしっかりと描ききった作品です。

報告「子どものための美術展'95」より

—子どもたちの感性に学ぶ—

8月15日(火)～9月17日(日)

一原有徳の作品《SUM》の垂んだ鏡の反射光が白く床に落ちている。「この光をゴミと間違えた人がいるんだよ」と言うと、「これ、掃除機で吸い取るの？」と幼稚園の小さな女の子がつぶやく。これを聞いた小学校3年生の男の子は「この鏡を外せば無くなるよ」「電気を消せばいいんじゃない」「鏡にペンキを塗ったら？」…。どんどん発想は広がってゆく。

先の展覧会「子どものための美術展'95 美術の光/光の美術」の鑑賞会でのひとこまである。鑑賞会は、この展覧会で私達が最も力を注いだ活動であった。

子どもたちの視線に合わせた展示の高さ、所々に置いた体験型の道具、子どもたちと共感しようと語りかけるパネルの言葉…。この展覧会では会場をみてまわるだけで作品に興味を持てるように、様々な点で展示に気を配った。それでも、興味を持って作品を見、自分の眼で価値を発見するためには、子どもたちと直に接しながらの会話による作品鑑賞が一番よいと考えたのである。

しかしこの鑑賞会で最も学ぶことの多かったのは、子どもたちよりも

私達担当学芸員であった。子どもたちの感性は私達の想像をはるかに超えていた。

美術は高尚で難しいからと敬遠されがちところがある。しかしこの子どもたちのような自由で柔らかい感性をもって作品をみれば、美術はずっと楽しく身近なものになるのではないだろうか。誰もが文化を享受できる現代にあって、美術はもっと私達に近いものであってよいはずである。

企画をする私達美術館側にも同じことがいえる。より多くの人に美術鑑賞の楽しみを知ってもらうためには、既成概念に捉われないことのない新鮮な感性で展覧会を構成することがとても重要になってくるであろう。私達は、もっと多くの子どもたちに美術に親しんでほしいと願っている。鑑賞会で得たことを糧として、次の企画を展開していきたい。

(美術学芸員 宮下東子)



—原有徳《SUM》を覗く子どもたち

美術館友の会からのお知らせ

●「友の会」会員募集

友の会は美術を受する人が集まり、鑑賞会や講演会、会報発行などの活動を通じて親睦を深め、美術館を支援する団体です。

平成7年度の会員の有効期間は平成8年3月31日まで。入会すると常設展の無料観覧や企画展の無料観覧券の配布、図録やレストランの割引、会報等の配布や研修行事への参加などの特典があります。年会費は右記の通りです。詳細や入会のお申し込みは新潟県立近代美術館友の会事務局にお問い合わせください。

[TEL 0258-28-4111]

年会費

- ・一般会員一般 4,000円
- ・一般会員学生 2,000円
- ・ファミリー会員 10,000円
- ・特別会員個人 30,000円(一口)
- ・特別会員法人 30,000円(一口)

※現在の会員は以下のとおりです。

一般会員	一般	784
	学生	26
ファミリー会員		185
特別会員	個人	2
	法人	60
合計		1,057

(9月12日現在)

利用案内

- 開館時間 / 午前9時～午後5時
- 休館日 / 毎週月曜日
ただし祝日・振替休日の場合は翌日が休館となります。
平成8年3月28日(水)～4月1日(月)は保守点検のため休館します。
- 観覧料金 / 企画展観覧料
企画展によって観覧料が異なります。なお、同観覧料で、常設展もご覧いただけます。
・常設展観覧料
一般……400円(320円)
大学・高校生……200円(160円)
中学・小学生……100円(80円)
※()内は20名以上の団体料金です。

THE NIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART
新潟県立近代美術館

新潟県長岡市宮前町字居掛278-14 〒940-21
TEL.0258-28-4111(代) FAX.0258-28-4115

美術連話(5) 「忘暑記」

新潟県立近代美術館長 前川 誠郎

今夏は暑かった。昨年も暑かったと言うがそのことはもう忘れて、一歳余計に齡をとっただけ老骨に応えたという感じが切実である。七月中旬にはロシアとイタリアへ行き、帰国した翌日あたりに梅雨明けが発表されて真夏となった。十日経っても二十日過ぎても旅の疲れが一向に取れない。同年輩の友人にも身体の不調を訴える人が多く、氣息奄々てこの夏を過ごしたのは何も私一人ではなかったようなのが、せめてもの気休めになった。

ただし嬉しいこともあった。それはこの年末から来年初めにかけて私に関わりのある書物が三冊出ることになり、その校正や何やでかなり気の張る仕事が続き、たとえ僅かでも毎日暑さを忘れる時間があったことである。その一つはアルブレヒト・デューラーの「ネーデルラント旅日記」の拙訳である。これはこのドイツの巨匠が1520年から丁度一ヶ年ネーデルラント、つまりいまのベルギーとオランダに当る地方へ所用で出掛けた際の日記であるが、本質的にはむしろ出納簿であって、毎日の支出や収入の委細が克明に付けられている。文中に見える通貨の名称は十五種余りに上り、それぞれのおよその価値を調べてそれが現在の邦貨でどの位になるかを考えるのは、大層難しいとともに面白くもあった。

基本になるのははライン・グルデンで、
1グルデン=252ペニツヒ=20ヴァイスペニツヒ=24シ
ェトゥーパー

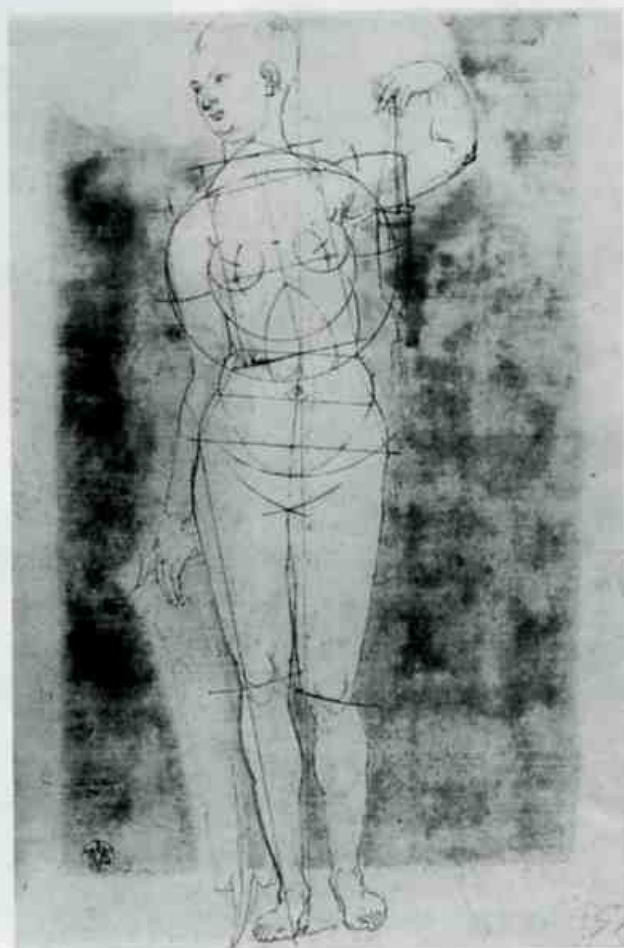
と言った換算式があるが、では我が円の現勢に直すと1グルデンは幾らになるのか。五百年前の、しかも外国の物価は到底正確に分かるものではないが、日記に書かれたローストチキン一羽が10ペニツヒとか、パンが2ペニツヒなどという食料品の値段はある程度の推定を許す手掛かりになるかと思う。いま仮りにローストチキン一羽二千円なりとしてみると1グルデンは約五万円である。従ってアントウェルペンの市のホテルの部屋代一ヶ月11グルデンは五十五万円になる。一流の旅館であるから先ずは妥当なところか。今と較べて大そう割高なのが交通費、そして格安なのが美術品である。当時デューラーは自作の全版画一揃いに対し8グルデン即ち四十万円の値を付けていた。油彩肖像も一作およそその見当であった。つまりこれ一点では下宿代が出ない額である。

日記で見るとドイツ皇帝やネーデルラント摂政とその宮廷の貴顕たち、またポルトガルの商務官やフッガー商店の支配人と云った富豪の面々、そしてエラスムス、グラフェウスらの碩学たちが綺羅星のごとく連らなってこの遠来の巨匠に歓迎の意を表し、また全ネーデルラントの美術家が鞠躬如として彼の意に添おうとする。旅中のデューラーはまさに画家の王であった。その人にして作品の値段は上記のごときのものであったのである。

この日記の拙訳は我が国におけるデューラーの著作の最初の刊行ということになる。

これに続けて同じデューラーの遺著「人体均衡論四書」の翻訳が下村耕史氏の訳で出されることになった。下村氏は私の九大時代の学生で、生来理論に弱い私がおもて余したデューラーの美術論を立派な日本語へと直して下さった。1528年出版の初版本のファクシミリを底本としていたので、ドイツ語も現行のものとはかなり違い、結果的には24ページの小字彙を巻末に付けることになった。デューラーに均衡論への目を開かせた人は何と前号に書いた「ヴェネツィア鳥瞰図」の作者ヤーコポ・デ・バルバリであった。

三番目にドイツはオットー朝時代(十世紀)の貴重な文化財であるライヒェナウ島聖ゲオルク教会堂の八面の大壁画の調査報告書がベルリンの書店から出る。640ページの大冊で、今を去る二十七年前に私が始めた研究が、いよいよ越宏一氏の手で纏められたものである。これらの二書は何れも私の単独の本ではないが、立てた志を引き継いで完成して下さった良き後輩に恵まれてそれぞれ二、三十年後に陽の目を見た嬉しさは、長生きして良かったの一語に尽きる。



アルブレヒト・デューラー《女性人体比例図》(1500年頃)
ベルリン 版画美術館